2012年3月15日発行(創刊2002年3月31日)

仙台文学館ニュース

第二十二号

Sendai Literature Museum News

日和山(宮城県名取市閖上)

文学のある風景

青空

新年は祝いの言葉を省いた賀状が多く届きました。喪中でもないようなのに、寒中見舞いとした人も多かった。住所が変わった地元の知人も何人かありました。そして午後には、はるか南から伝わってきた地震。ゆさゆさと揺られながら、規模は違えど、九カ月前の東京もこれに似ていたのだろうか、と思いを馳せました。

ひさしぶりに寒い正月でした。七草の翌日、今年初めての満月が上った大潮の頃には、防潮林の松林が消え地盤沈下したために海の面積が広くなった印象を受ける沿岸の土地のところどころが、湿地となり光っていました。その手前に、私の住まいからは大きな欅の木が見えます。近所の年長の知人が苗木から植えたもので、三十五年ほど経つという。その歳月を思うと、私などは自身も禍にあったアスベストの潜伏期間の事を考えずにはおれない。昨年も高度経済成長期に建築現場の仕事をしていた知人がアスベストが原因の中皮腫で斃れました。目に見えない汚染の被害は必ず後年になってあらわれてくる。

年末の集まりに欠席した人から寒中見舞いが届きました。あの日のことを忘れる努力をして、前を向いて暮らしていると文面にあり、つと窓の外へ目を遣ると、竹箒を逆さにしたような欅の枝先に、冬の青空が広がっていました。終戦の日も夏の青空だったそうですが、土とともに空もまた死者に通じていると見入りました。

(「佐伯一麦+古井由吉往復書簡」『朝日新聞』2012年1月23日)

小池 光の 気になる日本語 11

「ボールとストライク」

今日は野球の話。

日本の野球では少年野球でもプロ野球でもボールかストライクかコールするときは、必ずストライクを先に、ボールを後に言ってきた。いつごろ誰がきめたきまり、習慣なのか知らない。しかし、長い間そう言ってきた。

ワンストライク、ツーボール
ツーストライク、ワンボール

のように言うのでその逆ではない。

ところが世界的に見るとこういうコールの仕方はどうやら日本独自のものらしい。アメリカの野球というかベースボールは、ボールを先に言い、ストライクをあとに言う。

ツーボール、ワンストライク
ワンボール、ツーストライク

というのがアメリカ式である。野球が国際化しオリンピックやワールドカップなども行われるようになってくると、日本ばかりが日本式のコールの仕方に固執するわけにも行かなくなって、今年から日本のプロ野球はアメリカ式に変更した。高校野球はどうであろうか、たぶん高校野球もそうなのでないかと思う。

わたしは短歌をやっているので音感に敏感である。「ストライク」が5音である。「ボール」は3音である。ワンとツーはともに2音である。つまり5+2=7、3+2=5で7音、5音がここに顕在する。短歌の5775775の5音、7音である。

5音と7音の組み合わせで、5音、7音の順になるのを57調といい、7音、5音の順になるのを75調という。57調と75調はまるきり違う。その理由を語ると長くなるから省略するが、とにかく75調が調子よく発声しやすいことだけは間違いない。歌謡の歌詞などは多くが75調で、57調はまずない。

春高楼の　花の宴
めぐるさかずき　影さして
千代の松が枝　わけ出でし
むかしの光　いまいずこ

「荒城の月」はこの75調の典型にして名作である。それと同じで、

ワンストライク、ツーボール

と呼んでいるとき無意識に75調の韻律に乗っている。だからいいやすい。長く定着してきたゆえんである。それが逆になって妙にすわりが悪い。テレビのアナウンサーも心なしかいいにくそうだ。日本式は75調、アメリカ式は57調なのである。順番ひとつでえらい違いなのである。

学芸室日記

○今年の「100万人の年賀状展」(1月8日～2月5日)に寄せられた作品は、震災の影響もあって例年より少なめでしたが、文面は震災を踏まえたものが多く見受けられました。「頑張ろう」というフレーズはもとより、震災の体験を乗り越え、未来を志向する言葉が多く寄せられました。どの賀状からも、今年が穏やかな1年になることを願う気持ちが伝わってきました。

○毎年開催している、仙台文学館ゼミナールの宮沢賢治講座。今年は「注文の多い料理店」を中心に賢治童話について読み解く内容でしたが、参加者の中に、内館牧子さんのお名前がありました。内館さんは、これまでも草野心平や太宰治の展示の時に、当館に立ち寄ってくださっていますが、ゼミナールの参加は初めて。東京から毎回参加され、いつも一番前で聴講される熱心な姿に、講師の佐藤通雅先生も驚き、感服されていました。その縁で、2月には東京FMの内館さんの番組に、佐藤先生がゲスト出演。文学館をめぐる思わぬ交友が広がり、職員にとっても嬉しい出来事でした。

○1月から3月まで開催した「文学と格差社会～樋口一葉から中上健次まで」では、樋口一葉が愛用した文机を展示しました。明治5年に生まれ、わずか24年でその生涯を終えた一葉は、晩年の1年2カ月で「たけくらべ」「にごりえ」など、現在も読み継がれる作品を書き残します。その「奇跡の十四箇月」を支えたのが、幅85㎝奥行き40㎝程の、この小さな机でした。一葉は晩年の日記に次のように書き残しています。「しばし文机に頬づえつきておもへば、誠にわれは女成けるものを、何事のおもひありとて、そはなすべき事かは。……かゝる界に身を置きて、あけくれに見る人の一人もともといへるもなく、我れをしるもの空しきをおもへば、あやしう一人この世に生れし心地ぞする……」。明治の時代に筆一本で母と妹を養うという、途方もなく大きな志を抱いた女戸主・一葉。彼女はどんな心持で筆を執り、何を思って生きたのか。その心中に思いを馳せるばかりです。

(日本近代文学館蔵)

仙台文学館ニュース 第二十二号

仙台文学館 Sendai Literature Museum
〒981-0902 仙台市青葉区北根 2-7-1
TEL 022-271-3020 FAX 022-271-3044
http://www.lit.city.sendai.jp/

【表紙写真】佐々木隆二
【印刷】(株)ユーメディア
【挿画】古山 拓

再生紙使用 VEGETABLE OIL INK

シリーズ 私の一冊 第十七回

水上勉『土を喰ふ日々』

中沢 けい

仙台駅前の朝市が震災後も休むことなく店を明けていたと聞いてたいへんうれしかった。

食べる、寝る、そして着るという人間の営みは休むことも止まることもない。被災された地域の中には、食べもの、飲み水、それから休む場所にさえ苦労した地域とあったと聞くと、ひどく胸が痛む思いをした。

食べることは人間に限らず生きるもの全てに切実な事柄だ。食べることはすなわち生きることだと言える。と大袈裟に言えばそういうことになるけれども、一方では食べることほど楽しいことはほかにないとも言える。どんなときも、食べることは楽しい。

水上勉『土を喰ふ日々』は禅寺の小僧としての修行を通して精進料理を覚えた作家の食べることを巡る春夏秋冬を描いた随筆集である。あとがきを見ると『ミセス』誌に昭和五三年一月号から一二月号に連載された随筆に多少の加筆訂正をしたものだとある。

「同誌の記者諸姉におだてられて、約一ヶ年、軽井沢の山荘にこもって、畑をつくり、そこで穫れたものを中心に、私が少年時から、禅寺でおぼえた精進料理をつくってみて、それにいわでものことを云いまぶして、料理読本というにしては不調法で、文化論というにしては非文化的で、人間論というにしては、いかにも浅底の、とにかく体をなさない妙な文章になりつつあるのを承知しながら、おだてられるままに書きつないできたものである」。

このように、著者は「あとがき」で、謙遜ぎみに「土を喰ふ日々」を紹介している。副題は「わが精進十二ヶ月」だ。

初版は一九七八年一二月一七日発行。私は初版を所持しているはずなのだが、種々雑多な本の山の中に隠れてしまい、すぐには見つけられそうにないので改めて購入してみると二〇〇八年一一月一一日第二二刷という本であった。初版発行から三〇年以上が過ぎているが、この本は多くの読者に愛されている様子だ。新潮文庫からも同じものが出ているけれども、題字と装丁を中川一政が手がけている単行本のほうを愛する人も多い様子が重版の記録から見てとれる。

私はしっかりとした装丁の実用書を買うのが好きで、この本も初版が出たばかりの頃、サンドベージュのクロス装の本の様子を気に入って買ったものだ。

料理本としては不調法と作者は言うけれども、切る、煮る、焼く、蒸す、揚げるなどの基本的な調理法を知っていれば、料理の仕方はおおよそ解るような書き方をしている。もちろん至れり尽くせりの料理書ではない。けれども、調味料の分量まで細かく書き込んだ料理書よりもずっと、調理の流れが頭に入る書き方をしている。なにより、読んでいて、ああ、それはおいしそうだと、まるで目の前に皿に盛った料理を出されたような気持ちになる。純粋な随筆として書かれたものではないけれども、文章を読んで楽しむだけで、料理法が頭に入ってしまう本と言うのはたいへんありがたい。こんなに野菜料理をおいしそうに書いた本を、私はほかに知らない。三〇年に渡って多くの読者を得ているのが、その優れていることを証明しているだろう。

『土を喰ふ日々』水上 勉
(文化出版局)

純粋な随筆として書かれたものではないと、私は書いた。それは最初、この本を実用書のつもりで買ったという覚えがあるからだ。著者もそのあたりのことを考えて謙遜なあとがきを書いている。が、やはりこの本は立派な随筆だと改めて思う。なぜなら料理法を語りながら、調理法以上の何かが伝わってくるからだ。単なる調理の方法の説明なら、一度読めばそれでおしまいだが、この本は三〇年間、繰り返し読んでも飽きることがない。

文学と言うとまず小説を思い浮かべるのは、印刷技術が普及してからのことだ。印刷技術が普及する以前は詩歌が中心だったと、こう教科書的に説明すると、紀行文や日記それに随筆が視野から落ちてしまいがちになるけれども、紀行文、日記、随筆は文学の重要な分野であることは間違いない。にもかかわらず、文章は情報を伝達するものだという考えが強くなって以来、随筆はあまり顧みられることがなくなった。随筆は、情報伝達以上に文章で目には見えないある形を作り出すもので、その形に触れることで、繰り返しの再読を楽しいものをすることができる。形をフォルムと言う。フォルムを形と訳さずに姿と訳したほうが良いと小林秀雄が言っている。

フォルムを形と訳すか、姿と訳すか、あるいはその両方をとって姿形とするか。いろいろ議論はあるだろうけれども、この本の文章には姿形がある。

献立は畑と相談して決めると言う。まだ冬で、畑が寂しい時は乾物箱の中と相談すると言う。そういう姿形のある文章を読んでいるうちに、市場の野菜や乾物と献立の相談をする感覚が生き生きとしたものになってくる。

中沢　けい(なかざわ　けい)作家
1959年千葉県生まれ。明治大学政治経済学部政治学科に入学した1978年に、「海を感じる時」で群像新人文学賞を受賞。1985年「水平線上にて」で第7回野間文芸新人賞を受賞した。著書に『海を感じる時』(講談社)『女ともだち』(河出書房新社)『水平線上にて』『静謐の日』(福武書店)『楽隊のうさぎ』(新潮社)『うさぎとトランペット』(新潮社)など多数。またシンポジウムやフォーラムの司会・コーディネーターを数多く務めている。2005年から法政大学文学部日本文学科教授。

仙台文学館ゼミナール2011「佐伯一麦と読む現代の文学」で、中沢けいさんをゲストにお迎えしました。

中沢けいさん(左)と佐伯一麦さん(右)

ゼミナール始まって以来定番のカリキュラムとなっている「佐伯一麦と読む現代の文学」。今年は川端康成『雪国』を5回で読み込む、という内容で行いました。

これまでに何度も映画化されている、川端康成の代表作の一つですが、今回改めてきちんと読んだという人も少なくありません。参加者の感想も当初は好き嫌いの分かれるものでしたが、佐伯さんと共に読み進め、他の受講者の感想も聞くうちに、いろいろ読みが深まっていきました。

4回目には、作家の中沢けいさんをゲストにお迎えし、佐伯さんと対談しながら、その自然描写の巧みさなど、『雪国』の味わいを語っていただきました。特に、参加者の多く(の女性!)が引っ掛かりを覚えた駒子と島村の関係については、その関係のプロセスを小説の描写から丹念に解読。故あって雪深い北越で芸者として生きる駒子だが、もともと芸術や文化に関心が深く、精神的なものを深く追い求めている女性であること、演劇・舞踏の評論家である島村に駒子が惹かれるのも、そうしたところに要因があることに言及し、二人が単なる恋愛関係だけでなく同じものにひかれる対等な友達のようなつながりを持っていると指摘。参加していた担当も、深く共感しました。

かねてから中沢作品のファンだったという参加者も多く、旧知の間柄の佐伯さんとの話も弾んで、楽しく充実した時間となりました。

『雪国』(新潮文庫)

特別展

葛飾北斎生誕二五〇周年記念

「北斎漫画展」

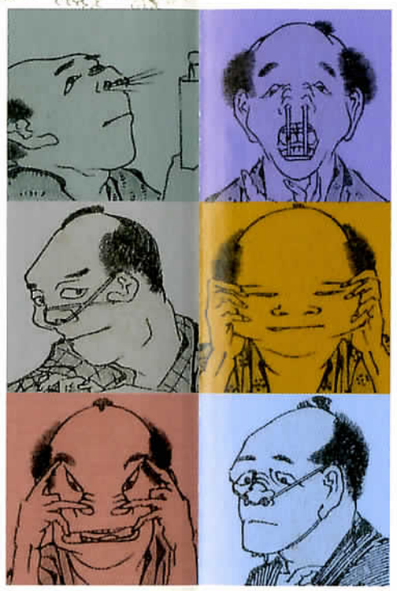
江戸の出版文化

生誕二五〇周年を迎えた葛飾北斎（一七六〇～一八四九）は、その九〇年の生涯の中で、肉筆画、錦絵、挿絵など幅広い分野で活躍した日本美術を代表する画家です。その題材は、風景画、風俗画、美人画、人物画、妖怪画、博物画、春画など、あらゆるジャンルにおよびました。中でも木版による『北斎漫画』全十五編は、三九〇〇余図を掲載し、北斎の豊かな表現力を語る魅力にあふれたものです。その貴重な版木は、京都の美術書出版㈱芸艸堂に今日まで伝えられ、近年、四人のベテラン摺師の手によって再び摺られました。この展覧会では、その中から二三四点の再摺作品、五十一点の版木を展示いたします。また葛飾北斎美術館所蔵の絵手本のほか、江戸から明治にかけての宮城の出版文化についてもご紹介します。北斎のユーモアと生命力にあふれる造形の魅力をぜひお楽しみください。

（学芸員　庄司潤子）

『北斎漫画』第12編
風のいたずら（部分）

『北斎漫画』



『北斎漫画』第10編
百面相（部分）

『北斎漫画』第12編
釣の名人

『北斎漫画』初編　19

文化九年（一八一二）年、北斎は、名古屋の門人牧墨僊宅で『北斎漫画』のもととなる下絵を制作。文化十一（一八一四）年正月に絵手本として初編が出版されました。卓越したデッサン力で森羅万象を描いた「百科図彙」であり、北斎自身の知恵袋でもあったこの本は、江戸の超ベストセラーとして人気を博しました。その後、北斎の没後である明治十一（一八七八）年に十五編をもって完結した超ロングセラーでもあります。その魅力は海を越え、ドガやゴーギャンなどの印象派の画家たちにも大きな影響を与えました。

江戸の出版in仙台

『北斎漫画』が発行されはじめた文化文政時代、仙台は京・大坂・江戸の三都に並ぶ出版の盛んなところでした。国分町にはたくさんの本屋さんが軒を連ね、寺子屋の教科書や暦、地誌のような地方出版物が盛んに発行されただけでなく、三都の大きな版元と協力して戯作なども発行されたといいます。

展示では、江戸時代から明治にかけて仙台の本屋さんが発行した出版物をご覧いただき、全国屈指の出版文化を誇った仙台の姿をご紹介します。

『北斎漫画』全15編

『北斎漫画』第12編　風のいたずら（部分）

『北斎漫画』ってマンガなの？

『北斎漫画』第3編
雀踊り（部分）

『北斎漫画』は江戸の風俗や人物、物語、動植物や風景、はてはお化けや神様までスケッチ的作品約三九〇〇余図が全十五冊に収められた絵のお手本帖なのです。初編の序文には「題するに漫画を以てせるは翁のみつからいへるなり」とあり、「漫画」と命名したのは北斎自身であったことがわかります。続けてみるとアニメーションのように見える図や着想の面白い図などがあり、そういう点でマンガ文化の生みの親といえるのかもしれませんね。

『北斎漫画』第12編　河童を釣るの法

『北斎漫画』伝承版木と
摺りあがった作品

葛飾北斎（一七六〇～一八四九）

江戸後期の浮世絵師。江戸本所生まれ。勝川春章の門に入り、春朗と名乗る。のち宗理・画狂人・戴斗・為一・卍など画風とともに号を変える。琳派や西洋画などから多様な画法を学び、大胆な構成とすぐれた描写力により独特の画境にいたる。『富嶽三十六景』などの風景画が有名だが、『椿説弓張月』などの読本の挿絵や『北斎漫画』などの絵手本にも意欲を示したほか、花鳥画や静物画にも傑作は多い。

展示会期及びイベント案内

会期：平成24年4月21日(土)～6月17日(日)

会場：仙台文学館企画展示室

観覧料：一般700円、高校生400円、小・中学生200円(各種割引あり)

①講演会「北斎漫画の世界(仮)」
講師：浦上　満 氏(浦上蒼穹堂代表)
日時：5月19日(土) 午後1時30分～3時
定員：200名
締切：4月24日(火)

②ワークショップ「親子で版木を摺ってみよう」
講師：若生　明才 氏(木版画作家)
日時：5月27日(日)
①午前10時～11時30分
②午後1時30分～3時
対象：10歳以上の親子
定員：各10組　＊材料費がかかります
締切：5月11日(金)

③ワークショップ「北斎漫画」で「北斎動画」
講師：松村　泰三 氏
(東北芸術工科大学准教授)
対象：小学生以上の親子
日時：6月3日(日) 午後1時30分～3時
定員：30組
締切：5月15日(火)

④講演会「みやぎの出版文化(仮)」
講師：小井川　百合子 氏
(元仙台市博物館副館長)
日時：6月9日(土) 午後1時30分～3時
定員：100名
締切：5月22日(火)

申 往復ハガキに住所、氏名、電話番号、イベント名を書いて、文学館へ。ハガキ1枚につき、1名(親子は1組3名まで)・1イベントの申込み。締切はそれぞれ必着。申込多数の場合は抽選。

もっと色々な昔の出版物に出会いたい方は、歴民にGO!

仙台市歴史民俗資料館企画展「オールドグラフィック2～仙台の出版文化」
4月28日(土)～6月17日(日)

幕末・明治～戦後にかけてのチラシ、ポスター、絵画、写真、雑誌などの出版物を展示します。この企画展では、私たちの身近な生活の中に存在していたこれらの出版物を通して仙台の出版物の文化を学ぶことができます。

仙台市歴史民俗資料館 TEL022-295-3956

企画展
井上ひさし資料特集展 Vol. 1
『十一ぴきのネコ』『雪やこんこん』『闇に咲く花』

仙台文学館では、二〇一一年に寄贈された井上ひさしの肉筆資料のうち、今年の「井上ひさし生誕77フェスティバル2012」の演目でもある三作品の資料を展示します。何度も書き直されたストーリーボードやプロット、膨大なメモ、原稿台本などの肉筆資料で、井上ひさしの戯曲創作の過程をたどります。

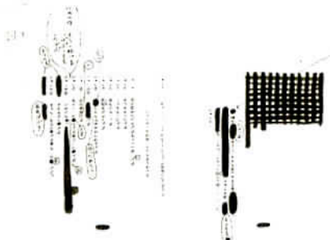
○会　期：二〇一二年三月二十七日(火)～四月十五日(日)
※休館日：毎週月曜日
○会　場：仙台文学館企画展示室
○観覧料：一般四〇〇円
　高校生二〇〇円
　小・中学生二〇〇円
○協　力：こまつ座
　ホリプロ
　遅筆堂文庫

こまつ座＆ホリプロ公演プログラム(2012年)
今年1月の公演では、長塚圭史が初演版を演出。

『十一ぴきのネコ』

腹ペコの十一匹の野良ネコたちが、「世界の野良ネコのため」大きな魚を捕まえようと旅に出る話。馬場のぼるの絵本『11ぴきのねこ』(こぐま社)を踏まえて書かれた戯曲で、「子どもとその付添いのためのミュージカル」という副題がつけられています。一九七一年にテアトル・エコーで演じられた初演版(エコー版)と、それに改稿を施し、一九八九年にこまつ座で演じられた決定版があります。一九七一年、第六回斎田喬戯曲賞受賞。

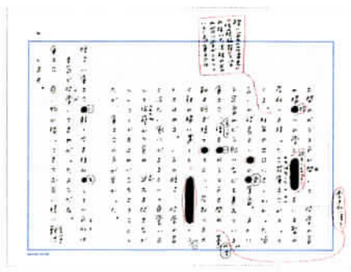
今回の展示では、初演版に手を入れた決定版原稿を展示して改稿の過程をたどります。



決定版「十一ぴきのネコ」原稿　初演版の書籍をコピーして、それに書き込む形で推敲している。

『雪やこんこん』

昭和二〇年代の終わり、北関東の芝居小屋「湯の花劇場」を舞台に、旅回りの「中村梅子一座」とそれを取りまく人々の姿を描く。大衆演劇と芝居そのものへの作者の愛がこめられた作品。全編にちりばめられるのは、井上ひさしが浅草フランス座時代から収集しつづけた大衆演劇の名台詞。そのメモなども紹介します。「昭和庶民伝三部作」の三作目。

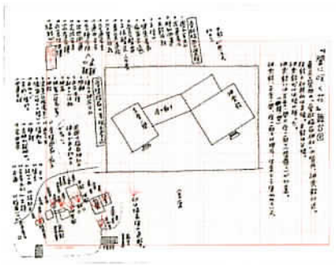


「雪やこんこん」原稿

井上ひさしが使用していた台本。左上部に「ひ」と書き込んである。

『闇に咲く花』

戦後間もなくの愛敬稲荷神社を舞台に、心優しくもあり、単純で愚かでもある庶民の姿をユーモアを交えて描きながら、日本の戦争責任を問うた作品。「昭和庶民伝三部作」の二作目。一二〇枚まで書き進めていた原稿を破棄し、もう一度書き直したその推敲から、劇構造がいかに変化したかを探ります。



井上ひさしが描いた舞台図

「井上ひさし生誕77フェスティバル2012」のお知らせ

1月から開催している「井上ひさし生誕77フェスティバル2012」では、合計8演目が上演されます。すでに『十一ぴきのネコ』『雪やこんこん』が大好評のうちに終了し、4月からも以下の作品が、稀代の演出家によって上演されます。お見逃しなく！

『闇に咲く花』演出：栗山民也　劇場：紀伊國屋サザンシアター　4月19日（木）～29日（日）　出演：辻萬長　他
『藪原検校』演出：栗山民也　劇場：世田谷パブリックシアター　6月12日（火）～7月1日（日）　出演：野村萬斎　他
『しみじみ日本・乃木大将』演出：蜷川幸雄　劇場：彩の国さいたま劇場　7月12日（木）～7月29日（日）出演：風間杜夫　他
『芭蕉通夜舟』演出：鵜山仁　劇場：紀伊國屋サザンシアター　8月17日（金）～9月2日（日）出演：坂東三津五郎　他
『日の浦姫物語』演出：蜷川幸雄　劇場：Bunkamuraシアターコクーン　11月
『組曲虐殺』演出：栗山民也　劇場：天王洲 銀河劇場　12月　出演：井上芳雄　他

http://inouehisashi77.jp/
お問い合わせ：こまつ座
TEL 03-3862-5941

常設特集展示
「仙台の児童文化活動とおてんとさん－90年のあゆみ」

一九二一（大正一〇）年三月、スズキヘキと天江富弥によって、日本で初めての童謡専門雑誌『おてんとさん』が創刊されてから、昨年で九〇年を数えました。「みやぎの子どもにはみやぎの童謡を」というヘキと富弥の思いは、終刊後も影絵や童話会など子どものための様々な活動へと発展を遂げ、その志は現在も「おてんとさんの会」へ脈々と受け継がれています。今回、九〇年の節目として大正から昭和初期の児童雑誌などの貴重な資料や、みやぎの児童文化運動に尽力した教師たちを紹介し、雑誌『おてんとさん』をめぐる交流と、みやぎの児童文化を育み続けた活動の系譜を紹介。懐かしいチラシやガリ版刷りの冊子に再会できます。ぜひおいでください。

会期：2012年3月27日(火)
　～4月15日(日)
会場：仙台文学館常設展示室
観覧料：一般400円、
　高校生200円、
　小・中学生100円
　(各種割引あり)

会期中のイベント

①映像で見る「おてんとさん」の90年と童謡
日時：3月31日（土）午後1時30分～3時
会場：仙台文学館講習室
定員：100名
申込み不要、直接会場へ
〈第1部〉映像で見る「おてんとさん」
　講師：加藤理氏（東京成徳大学教授）
〈第2部〉「おてんとさん」の童謡をうたおう
　出演：コーラス・ユキムシホー

②おてんとさん影絵で遊ぼう
日時：4月15日（日）
会場：仙台文学館講習室
〈第1部〉影絵を見よう
　お話や歌にあわせた楽しい影絵を上演します。
　影絵を見た後はその舞台裏も見てみよう。
　出演：おてんとさんの会
　時間：午前11時～11時30分
　申込み不要、直接会場へ
〈第2部〉影絵で遊ぼう
　動物やキャラクターの人形を作って、実際に舞台で動かして遊びましょう。
　講師：おてんとさんの会会員
　時間：午前11時40分～12時30分
　定員：30組（親子向け）
　申込：電話にてお申し込みください。

好評の仙台文学館ゼミナール、2012年も開催します！

二〇一一年度の仙台文学館ゼミナールは震災の影響で日程や会場を変更せざるを得ず、皆様にはご迷惑をおかけしました。震災の後で参加者が少ないのではないかと心配しましたが、心待ちにしていらした皆さんが多数参加してくださって、活気あるなかに全日程を終えることが出来ました。

二〇一二年度も充実のラインナップを予定しています。宮沢賢治の講座や「表現をみがくコース」の各講座など、毎年開催するおなじみのものもあれば、新たな講師をお迎えしてスタートする講座もあります。皆さんぜひ奮って参加してくださいね！　お待ちしています。

学芸員　阿部朋子

仙台文学館ゼミナール2012（予定）

「近代文学を読み解くコース」
　宮沢賢治～『鹿踊りのはじまり』・『セロ弾きのゴーシュ』を読む……佐藤通雅
　夏目漱石の作品を読む……小森陽一
「日本の古典に親しむコース」
　藤原清衡と文学……佐倉由泰
　中沢けいと読む『源氏物語』……中沢けい
「現代文学を探究するコース」
　井上ひさし作品を読む……高橋敏夫
　清水眞砂子と読む児童文学……清水眞砂子
　佐伯一麦と読む現代の文学……佐伯一麦
「表現をみがくコース」
　朗読ワークショップ……渡辺祥子
　文章講座……クマガイコウキ
　俳句実作講座……高野ムツオ
　川柳実作講座……雫石隆子